



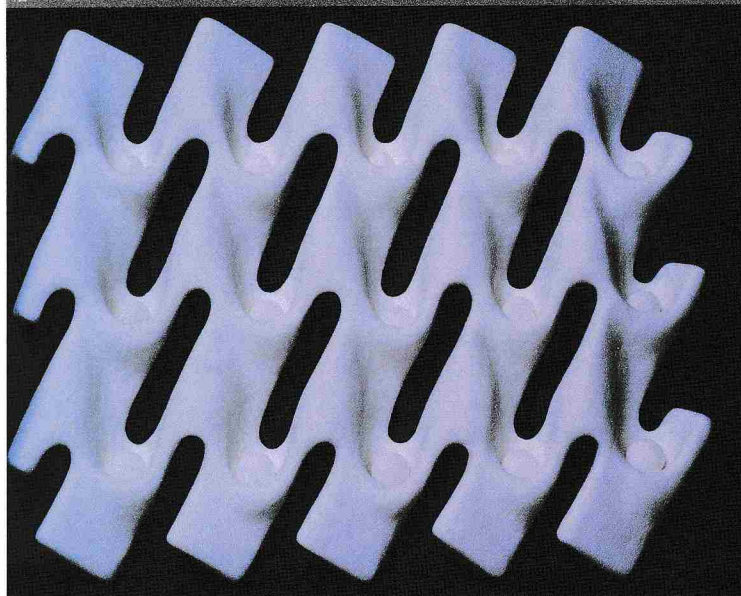
「景」 KAI



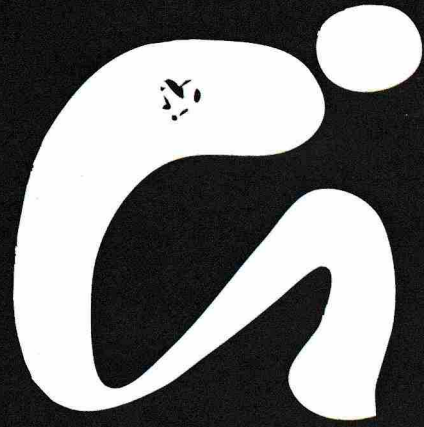
「結」 MUSUBI



「結」 YUI



「結」 WASHI



NO.33 2000.12

aqca

社団法人日本建築美術工芸協会

アピアランス



aaca会員
造形作家
SEKITA SHIGEKI
世木田 茂樹
有)セキタデザインスタジオ 代表
神奈川県横浜市金沢区町屋町3-15 金沢建設会館
3F-A
TEL045-788-8011

「界(KAI)」
設置場所：
1000mmH×250mmW×250mmD

最小限の構成要素によってある空間を仕切り意味性をもたらず一種の門である。材料にMDFとアルミを使用した、NCマシンによってMDFの積層板から翼に似た断面形状に削り出し、本漆塗り(本朱)仕上げとした。



aaca会員
七宝焼壁画デザイン・制作者
ATSUKO KITAMURA
北村 温子
(株)オバ 代表取締役
東京都新宿区高田馬場1-18-8
TEL03-3200-7867

「結び MUSUBI」
設置場所：東京外国語大学図書館ブラウジング
(府中市)
1400mmH×3900mmW×36mmD ※面合わせで奥行36

百年建築の為に独自で開発した壁画三重工法(特許出願申請済)を基礎に素材の銅板の暖色は(人間)黒線は(学問)四季の図形は(日本)を意図。国際交流を中央の(水引)の紐で結ぶ。更に日本初の象眼七宝技法壁画の古代文化を構築する。



aaca会員
ファイバーワークス
KIKO MACHI
間地 紀以子
東京都中野区野方4-37-6
TEL03-3385-0385

「結-YUI-」
設置場所：グランドアーク半蔵門ホテル(千代田区)
820mmH×3070mmW×80mmD

素材、技法にとらわれず自由な発想で建築空間を豊かにする作品づくりを心がけています。美しくデザインされた空間、壁面を作品に取りこみ、綿糸、真鍮を素材に、明快に簡潔に、結婚式場を飾るファイバーレリーフを制作しました。



aaca会員
彫刻家
YOSHIKAZU OCHI
越智 義一
東京都新宿区中井2-24-11
TEL03-3953-1561

「作品(W~H)」
設置場所：
700×550mmH

エンドレスの形態を基本に考えて造形を試みて約30年が過ぎてしまった。以前から壁面用の作品を造りたいと思っていたところ、軽い素材を見つけたので、3年前から「波動」を基にしたシリーズ作品を制作した。

CONTENTS

第12回2000奈良aaca景観シンポジウム……	1
時代の華一輪……	4
aacaトーク……	7

■表紙デザイン

高部 多恵子

表紙の作品を募集しています。
事務局までお問い合わせください。
尚表紙のレイアウトは、広報委員会でいきます
のでご了承下さい。

発行：社団法人 日本建築美術工芸協会
Phone 03-3457-7998
Fax 03-3457-1598
〒108-0014
東京都港区芝5-26-20
建築会館 6F

振替：00110-2-365085

編集：(社) 日本建築美術工芸協会 広報委員会

広報担当理事 柳澤孝彦

委員長 玉見満

副委員長 高部多恵子

北村孝昭、石田真人、山崎輝子、浅野由紀雄、

長谷川亨、瀬川秀之、佐田興三

事務局長 伊藤留雄

制作協力：中栄印刷工業株式会社

第12回2000奈良aaca景観シンポジウム「古都と景観」

日時：平成12年7月27日(木)
午後1時30分～5時
場所：なら100年会館中ホール

パネルディスカッション

コーディネーター：内井昭蔵

パネラー：白幡洋三郎

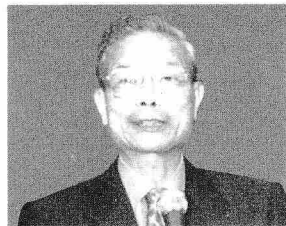
高口恭行

絹谷幸二

河瀬直美



文化庁長官
SASAKI MASAMINE
佐々木 正峰氏



奈良知事
KAKIMOTO YOSIYA
柿本 善也氏



奈良市長
OHKAWA YASUNORI
大川 靖則氏



会長
ASHIHARA YOSINOBU
芦原 義信

あいさつ

芦原 義信 会長

第12回2000奈良aaca景観シンポジウムにお集まりいただきまして誠にありがとうございました。私ども日本建築美術工芸協会は建築家や美術家、工芸家が一堂に会して種々のディスカッションを重ねて日本の都市景観を少しでも良くしていこうとい

う団体であります。その一環として毎年各地でシンポジウムを開催いたしてまいりました。第12回目は奈良市で催すことができました。

これは関係者の皆様の大変なご支援のおかげであります。講師の諸先生は、日ごろ

なかなかお目にかかれぬ方々でご多忙にもかかわらず、ディスカッションして下さいますので皆様最後までご静聴よろしくお願い申し上げます。終わりに際し、このシンポジウムが有意義でありますことを祈念して、ごあいさつとさせていただきます。

柿本 善也 奈良知事

本日のシンポジウムは「古都と景観、でテーマとしては良い。同時に答えが難しい問題です。景観は相当幅の広い問題で一人ひとり景観に対する考え方が違うと思います。ただ景観はとても大切です、お互

いに景観を考えることは必要でしょう。どうすれば皆さんの思っておられる奈良を感じてもらえるかです。景観は生きています。イメージの中で1300年生き、培ってきました。一人ひとり議論してもらい、われわ

れ行政はその中から答えを見つけることになる。奈良らしい景観を皆さんと一緒につくっていききたい」とあいさつされた。

大川 靖則 奈良市長

「市制100周年を迎えた。世界遺産を皆さんと一緒に守っていかねばなりません。先人が全知全能でつくりあげたもの。学術、芸術、技術と人の心までも集まって

います。これを守るためにも住民の理解を得て景観を守り、街づくりをすることは意義のあることです。今後の古都奈良の保存と活性に向けシンポジウムが成功に終わっ

てほしい」と述べられた。続いて佐々木正峰文化庁長官の祝辞の後パネルディスカッションに移った。



aaCa副会長
建築家、滋賀県立大学教授
UCHII SHOZO
内井 昭蔵氏

奈良は日本人にとって心の故郷であり、遠くシルクロードの終着点として夢とロマンあふれる土地であります。最近では古墳をはじめ多くの遺跡の発掘が進み古代都市がにわかに脚光をあび、人びとの関心を集

めております。

奈良は古代都市の遺跡と歴史が埋まっており、山や川、森や小道にいたるまであらゆる景観は古代の歴史が反映されたものと考えられます。

私たちは奈良の地に立ち、先人たちは、いかなる思いのもとに「まちづくり」をしたかに想いを寄せ、わが国の都市景観のあり方を考えてみたいと思いこのシンポジウムを企画いたしました。



国際日本文化研究センター教授
SHIRAHATA YOUZABUROU
白幡 洋三郎氏

「視覚対象」では概念が狭い 点をどこまで膨らませるか

「古都はかつて都があったとらえ方をすると故郷という考えができる。それぞれの人の中に古都、故郷がある。そのひとつに奈良がある。かなり共通している。つまり故郷と古都を繋いで考える必要がある」

「これを言えばおしかりを受けるかもしれませんが、古都は元気になって困るようなイメージがある。景観というと大きな関心は庭園だ。庭園は建築よりも芸術的な含みがある。景観は視覚対象となると狭い概念になる。景観を破壊するから建設は駄目

というはおかしい。景観は“目を閉じれば思い出す、快適だ”ということにも受け止められる」

「昔、奈良県庁舎や京都タワーの建設で景観論争になった。古都和景観は故郷を守る、持続させたいのと並行して現在の暮らしを守ることもつながる」

「江戸時代、奈良は大きな産業都市だった。当時、素麺、塗り、酒など奈良は高度な産業がたくさんあった。これが明治時代ごろから奈良は“過去のある時期”という

とらえられ方に変わってきた。古都は初期は過去の栄光が中心だった。1930年代以降は、観光という考えで復活し大事なものとなった」

「奈良の景観を視覚で考えると、点が大事だ。大景観、大風景に対する疑問が、歩いてみると良い町並みに出会え解消する。この町並みみたいな点をどこまで膨らませるかが、今後の奈良の景観を考えるうえでの出発点になる」



一心寺住職、建築家、造家建築研究所主宰
TAKAGUCHI YASUYUKI

高口 恭行氏

「はっきり言って日本の都市景観は見劣りする。世界的水準で低く見られるのが景観だ。私の一心寺は大阪の上町台地にある。山門を建設するとき、歴史の散歩道や夕陽丘プロムナード構想、人形芝居フェスティバルなどの背景に配慮した」

「ただ現実として実感したのが、法的な景観をつくる制度が不備、選択の範囲がと

ても広く目標像をだれも知らない、リバイバルでは役に立たない、抽象的形態は心に響かないことなどだ。とくに最近の建築には、抽象化したそのデザインなどが景観になるという。これはやはり違うと思う」

「当事者が設計・施工する立場からすると現行制度は理解できない。景観をどのようにリードしていくかがわからない。例え

ば、禁煙と言うが私にとってこれが何が良いのかになる。これと一緒に景観はだれがだれに言っているのかわからない。良い悪いは別にして景観を考えるならもっとエキセントリックにやるべき。景観も当事者の立場で考えていくのはまだ50年はかかるのでは……。今後、景観を考えていくうえでは水と緑しかない」

景観つくる法的制度がない もっとエキセントリックに



aaca会員
画家、東京芸術大学教授
KINUTANI KOUJI

絹谷 幸二氏

「いま（平城京の）朱雀門を再現している。大極殿も再現できれば素晴らしい。ただ過去を復元するだけでいいの。イタリアのベネチアに3年ほど住んで、帰国したら日本はなんだかぐちゃぐちゃのイメージだったが、奈良に帰ってくると良かった。自然、音のすばらしさは奈良にある。奈良は素敵だ」

「忘れ去られたところに新しいものを発見する。奈良の景観もこの意味でたくさん守られている。奈良も生きていかねばなら

ない。つまり観光もいいが、知的好奇心を現代の人が味わえる奈良が必要だろう」

「（高校まで）奈良に住んでいたとき、どうしてこんなに古い町がいいのかという気持ちで東京に行った。今はこの町が新しいと感じる。次世代のヒントが奈良のまちや路地裏にあると思う。この景観が世界に提言できればすごい。次世代への新しい感性が景観になる」

「公共事業（建設事業）でも奈良でするには、太陽電池を奈良瓦でつくるなどの発

想が欲しい。水と油は混ざらないと思っていたが、今はさまざまな事象で混じる状況が多い。このことを踏まえると奈良は古いようで、大変新しい町と考えている」

「美しいのはリスクマネジメントを伴う。美しい京都、奈良など古都の景観を人類にとってリスクマネジメント。目で見たい美しい奈良を構築すること、新しい建物をどんどんつくることは双眼で見えていくしかない」

知的的好奇心味わえるように リスクマネジメントを伴う



KAWASE NAOMI
映画監督、映像作家

河瀬 直美氏

「文化に対する考え方が反映されているなら、日本は文化が劣っていると感じる。それは情報が均一化されているためだ。外国は個人・個の考え方を発言しやすいし、それが認められやすい」

「景観に関してはもっと特徴を持ってほしい。奈良は文化や宝物がたくさんある。都会にありえない価値がある。この価値に気付いていない。人間というのは、いったん生活している場を離れないとその場所の価値がわからない」

「シルクロード博覧会が十八歳の時にあった。その時、（市内の）看板が派手になり、それも統一性がなかった。これが奈良の目抜き通りかと思ったら淋しかった記憶がある」

「奈良には山も川もある。この遠景を取り入れる小さな整備をしていくべき。五十年後の奈良を造るのは、今から整備していかねばならないことを今の子供たちにしっかり覚えさせておくことだ。整備にあたっては日常的に生活として活用できることが望

ましい。観光だけでなく、人間の生活として整備してほしい」

「若い世代の突出した感じを素直に受け止めてもらえれば奈良はもっとよくなる。そこに住む人たちが、自分たちの価値が世界一だという気持ちをもつこと。この雰囲気を活活化させることで景観への考えなどが出てくる。そして皆が奈良へ行きたいという気持ちにさせることをもっと情報発信することだ」

遠景取り入れた小さな整備 自分たちの価値が世界一と

シンポジウムに参加して



aaca会員
(有)アトリエ・ムーブ 代表
KIYOKO IKEGAMI
池上 清子
横浜市中区元町1-50 元町バセオ108
TEL045-663-4881

ー歴史・その流れの中でー

7月27日2000奈良aaca景観シンポジウムが開催されました。開催会場は磯崎新氏設計による「なら100年会館」。テーマは「古都と景観」、コーディネーター内井昭蔵氏(建築家、工学博士、滋賀県立大学教授)パネリスト白幡洋三郎(国際日本文化センター教授)、高口恭行(一心寺住職、建築家、造家建築研究所主催、京都大学工学博士)絹谷幸二(画家、東京芸術大学教授)河瀬直美(映画監督、映像作家)と、それぞれの環境、職業的視野、体験を基に個性溢れる方々の意見と会場からの質疑応答も意味深い濃い内容でした。

その中でパネラーの方のお話の中に共通のことが二つありました。その1は比較文化つまり生まれ育った街の良さを認識することが出来るのは、その地を離れ異文化にふれた時初めて感じる事が出来我が古郷はどうあらねばならないかを模索するよ



奈良県建築士事務所協会理事
大塚殖産株式会社取締役
YOSHIAKI KITAGAWA
北川 善明
奈良市藤ノ木台1丁目2番15号
TEL0742-43-9191

7月27日なら100年会館にて『古都と景観』をテーマとするシンポジウムに参加する機会に恵まれ、久しぶりに学生時代のような新鮮な想いがコンコンと湧き出してきました。このシンポジウムは、私が所属する奈良県建築士事務所協会と奈良県建築士会の両協会からお誘いを受けたので参加しました。最初は失礼ながら(残念ながら)日本建築美術工芸協会という組織そのものすら知らなかったのですが、シンポジウムのポスターのすばらしさというか、私好みのそのデザインが気に入り参加する気持になったのです。

その日は400席の中ホールが満席になり、約100人ほどの方が立っておられたようですが、運よく私は席につけて落ちついて参加できました。急ぎよ椅子を持ち出しセッティングされたスタッフの方々、本当にご苦労さまでした。

プログラムは日本建築美術工芸協会の芦原義信会長の挨拶ではじまり、共催である奈良県の柿本善也知事、そして奈良市の大川靖則市長が歓迎と、盛会を祝してのご挨拶を述べられた。その後文化庁の佐々木正峰長官が祝辞を述べられ、いよいよパネル

うでありました。史跡をどのように残しどのように創り変えるべきか、特に埋蔵物の宝庫古都奈良の問題は簡単に結論が出るものでもないでしょう。私個人的体験見聞からになります。「鎌倉の御成小学校の改築問題に直面した時のこと、イタリアに観る遺跡保存ー観光の徹底した方針、またイスラエルにおける城壁に囲まれた旧市外とその周辺の新しい街と砂漠を緑化する巨大PJ」など他の国々の事例と比較してみたり、8月11日朝日新聞夕刊掲載「奈良そごう」の強引な建設経過話題がありありと読めるなどaacaに加入させていただきイベント初参加の収穫は多大了。その2は、行政とのかかわりの問題ーこれはどんな場合にもついて廻る問題のようです。良き未来のために市民、行政、アーキテクト(具体的に構想設計する人)がどれだけ理想に近付ける為に情熱(エネルギー)を費やせるか具体的な行動を起こせるかにかかっておりましよう。「景観をつくる制度にはなっていない

ディカッションがはじまりました。パネリストに国際日本文化研究センターの白幡洋三郎教授、一心寺住職であり建築家の高口恭行氏、画家であり東京芸術大学の絹谷幸二教授、映画監督であり映像作家の河瀬直美氏。そしてコーディネーターとして建築家であり滋賀県立大学の内井昭蔵教授が紹介された。内井氏から古代都市の遺跡と歴史が埋まった奈良の地で、先人達はいかなる思いのもと《まちづくり》をしたかに思いを馳せ、わが国の都市景観のありかたを考えてみたいと思い、結論が出るわけではないが、皆さんと共に考えこのシンポジウムを進めていきたいと話はじめられた。その後各パネラーが一人ずつ意見を述べられた。これから以降のパネルディスカッションについては、協会に全文の保存資料があり、別な形で紹介されるであろうと思われるので、今回は割愛させていただくことにする。私を感じ、思ったことをこの紙面を借りて書きたいと思います。

私はこの奈良で生まれ、育ち、そして今も生活しそして働いている。建築家として今回のテーマ『古都と景観』は身近に感じるテーマであり、またいつも悩みの種でも

いー目標像を誰もよく知らないー」と語るパネラーの言葉がいま心に迫り来ます。

形成期はエネルギーに溢れ、頂点に達すれば崩壊が待っている。今ミレニアム記念の四代文明展が開催されておりますが紀元前6000年の文明が語りかけてくれるものに目と耳を傾け当時の人々の暮らし振りを想像するのも悪くはない。中国文明展(横浜美術館)においては高松塚古墳の壁画(模写)と対比する展示場面もあって、奈良の暑い厚い旅の楽しく乗り多かつたことを思い起こしております。私横浜元町の片すみにて現代美術系の企画画廊と建築に関わるネットワークのコーディネイトを仕事としております。永い歴史の中から見れば今私がしていることは「点」でしかないのですが、良い自然環境と良い文化を提供し続ける情熱を更に持続できるような旅であったことを嬉しくおもいます。

ご同行の皆様、参加者交流会の集いで出会った方々、ありがとうございました。

あるのです。それは『景観』についてであり、『景観』を形成する事象を普遍的な事として自分自身で納得理解しているわけではないのです。パネラーの高口氏が、クライアントあるいは設計者だけで、景観を論じるものでなく、そこに住まいする人や訪れる人、その他多くの人達が『景観』について論じ、共通の認識をもってイメージできる『景観』が必要である。(人々に認知されるのに、この先50年ぐらいかかるでしょうが…)と発言されていたと思うのですが。まさしくその通りとひざを叩く思いでした。きょうのようなシンポジウムを通じて、多くの人たちに参加していただき、『景観』について多くの人たちに論議していただき、共通認識としての『景観』がイメージできる奈良の街ができあがったとき、また今と違った古都奈良の『景観』がうまれるのでしょう。

最後になりましたが、このようなシンポジウムが継続して開催され、そして盛会であることを念じ、aacaの益々のご隆盛を心からお祈りいたします。

(8月1日記)



aaca会員
一級建築士事務所
株式会社 ワイディー代表
YAMAMOTO MAKOTO
山本 誠

東京都練馬区旭丘1-66-5-1402
TEL03-5983-8275

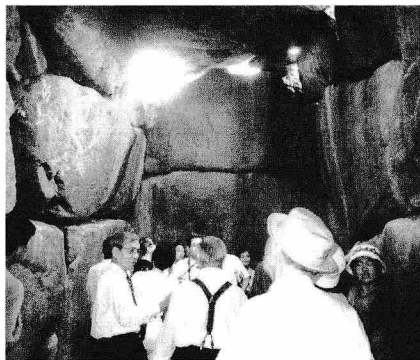
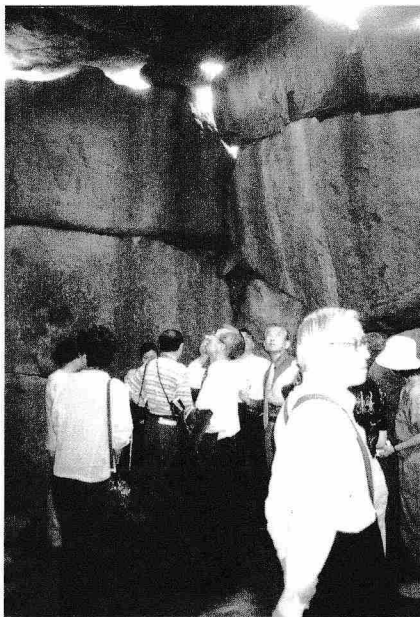
今回のシンポジウムに参加した正直な理由は「奈良」で行われたからだ。5月には伊勢神宮に詣で、内宮、外宮、別宮と多くの摂社、末社を巡り、森を背景とした本殿と、次の遷宮を待つ芯の御柱の空間を前にした時、いままで体験したことのない感動にとらえられた。「なにごとのおはなしますかはしらねども かたじけなさになみだこぼるる (西行法師)」千数百年もの間、姿を変えずに守り続けた意志に頭が下がる。新しい建築技術が伝わりながらしかも20年に一度の改築の機会(遷宮)がありながら掘立て柱のままである。動乱の時代、外来文化の押し寄せた時にも動じることなく伝統を守り抜いた。日本の歴史は常に新しいものを取り入れ、時代に乗り遅れまいと疾走して来た。特にこの数十年の加速度的変貌は凄まじい。生物種の絶滅は100年前は1日に1種だったが、現在は100種に達するという。20世紀は自然と伝統・文化の破壊の世紀と言われるだろう。新世紀を目前にして、aacaのシンポジウムが歴史と文化の都、奈良で行われたこ

とは意識深い。

久し振りに訪れた奈良は(学生時代の2週間の古美術研究、奈良博以来)他都市の変貌ぶりに比べると、駅前の風景が少しも変わっていないのに驚く。奈良ホテルから三月堂への朝の散歩では30数年前と少しも変わらない景観を楽しんだ。三月堂からの眺望は「子供達に伝え残せる遠景の記憶(河瀬氏)」と言っている。深夜に奈良まち辺りを歩いたが、「奈良まちの路地裏には八百神がいて、へっついさんがいる。(絹谷氏)」と思うと、寝しずまったまちの中で、今頃お地藏さんやへっついさんが夢でも見てるかと思うとうれしくなってくる。夜空に浮かぶ低い家並みを歩きながら、シンポジウムでの印象に残った言葉を思い出す。「あるが儘を受け入れるまち、雑草をその儘にしている文化を守りたい。観光だけでなく生活の中に景観を。(河瀬氏)」「抽象的な形態は心に響かない。(高口氏)」などなど。遠景は自然景観が主体だが、近景は生活そのものと言える。奈良の近景を守ることはそこに住む人の生

活を守ることに他ならない。「江戸時代には奈良は産業都市であり、奈良漬、奈良酒、墨・硯、出版が盛んであった。(白幡氏)」「中小企業やお店の人が生き生きしているまち。(河瀬氏)」その奈良のまちも、地域を支える気持ちを忘れれば、まちから路地が消え、近景を失っていく。

翌日の観光バスによる飛鳥巡り。高松塚古墳、石舞台、今井町の江戸時代の町並み。私は桜井で降りてもらい、山辺道へ。三輪山のすべてを御神体としている大神神社を参拝した。そこからの景観はまさに「倭は国のまほろばたたなづく青垣 山隠れる倭しうるはし(倭建命)」であり、自然と共に生きていた時代の躍動感に溢れている。自然を蔑ろにし、大地を傷つけ、今や地球生命体(ガイア)さえ脅かし、親殺し子殺しさえ驚かなくなっている昨今、古神道の坂田安儀宮司が言うように「神道とは自然を教典とした、生命の信仰である。」という原点に戻るのが来たのだと、その風景を目の前にして、確信した。



時代の華一輪



aaca会員
九州芸術工科大学教授
SATO MASARU
佐藤 優
福岡市南区塩原4-9-1
TEL092-553-4504

人間の感性を生かす 「アートパーク」の提案

今、情報と環境との接点にあるようないくつかの課題と取り組んでいる。音のサインのあり方(注1)や、視覚障害者を対象とした情報表示の方法(注2)や、農村景観における色彩の問題(注3)などである。これまでは主に健常者のためのサインや都市景観について研究してきた。福岡市の都市サインはその代表例で(写真)、多言語併記によって都市の国際化の一翼を担った。現在はさらに都市情報のバリアフリーや、メディアとしての都市環境について考えている。

そのうちのひとつ、「アートパーク計画」の報告書がまとまった。健康運動施設開発開構のひとつのプロジェクトとして3年越しで取り組んできたもの。現在

の都市公園が必ずしも有効に活用されていないところから、都市に緑を提供するだけでなく、現代の都市生活者の心身をリフレッシュさせる方法は何かと、根本的な命題に立ち戻って検討してきた。

新しい技術を活かした公園の姿を考えてみると、心の中にあるイメージの自然や、五感を刺激する公園など、人間の感性を基盤とした公園のあり方が浮かび上がってきた。この発想を支える社会的な追い風もある。生態系への関心の高まりや、イングリッシュガーデンの流行、情報技術の発展などである。身近な自然への郷愁が、単なるノスタルジアではなく、実体空間と仮想空間との合間に求められている。そのような現代の都市にとって必然性のある公園を「アートパーク」と呼ぶことにした。

アートパークでは、次の3つの理念を

大切にしたいと考えている。1)人間のイメージを刺激する公園であること。2)誰にとっても快適な公園であること。3)21世紀にふさわしい独創的な公園であること。人間の感覚をクローズアップし、自然との新しいかかわりの中で利用者自身が主体的にイメージを解放することができる公園をめざしている。

その中でも最もやりたいことのひとつは、赤坂見附の角にある狭い公園に高層公園をつくることである。1階から順に「地、水、火、風、空」とするなどはどうか。もうひとつは、森をつくって樹上だけを回遊する公園である。その他、暑さや寒さを3D映像とともに体感するバーチャル公園であるとか、砂の名園を陶板でつくって中からの視点を体験するとか、アイデアは尽きない。

この報告書は、知久健一(ササキエンバイロメント・デザイン・オフィス)の指導のもと、安彦建夫(松下電工)、玉見満(大塚オーミ陶業)、深井克彦(コトブキ)が研究会委員として研究にあたり、佐藤優が監修して、とりまとめたものである。(アートパーク計画の問い合わせ先=本協会広報委員長玉見満)

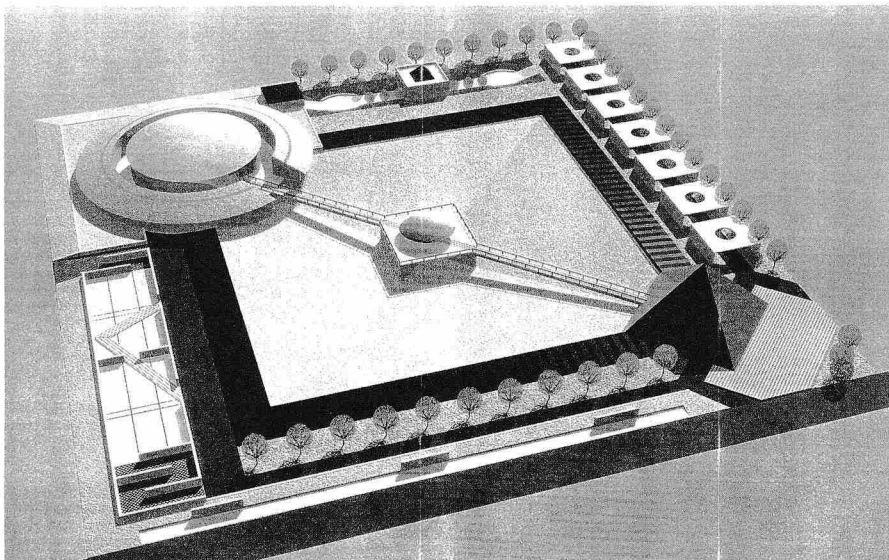
(注=その他の問い合わせ先)

1) (社)日本サインデザイン協会
電話03-3818-8537

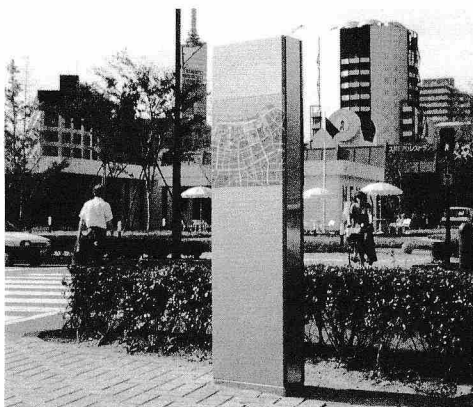
2) 芸術工学会誌21、pp65-70

芸術工学会事務局=神戸芸術工科大学
電話=078-794-5051

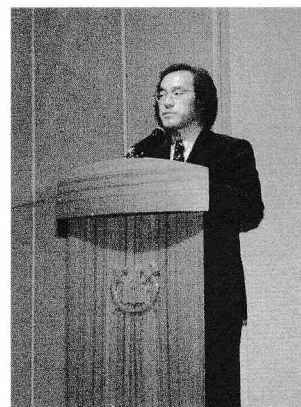
3) 多摩美術大学教授田口敦子
電話0426-79-5623



アートパーク概念モデル鳥瞰図 (作図=知久健一)



福岡市の歩行者用サインと自動車用サイン。(共同設計者=定村俊満、中牟田麻弥)





aaca会員
TERUKO YAMAZAKI
山崎 輝子
千葉県我孫子市並木9-22-9

表現素材としての皮革

まず、皮革が人間生活とどの様に関わってきたかと言う点から話を進めてみます。古代のアルタミラの洞窟壁画を思い浮べて見ますと、原始時代の人々は、野山に獲物を追い、獲た食糧の副産物として毛皮や皮で、身の危険や寒さを防いでいた事でしょう。氷河期のネアンデルタール人は、「毛皮」を身に付けていたとの事ですし、タクラマカン砂漠から発掘された古代人は「革のブーツ」を履き、カナダのアイスマンは「革の帽子」を。ツタンカーメン王は「革のサンダル」を履いてました。糸を紡ぎ布を織る事を知らなかった頃から今日、二〇〇〇年迄、革の用途はあまり変化はなく、身の廻りの生活の場でいろいろに利用されてきております。

「皮」は英語で「Skin」ですが、これは生の皮の事を意味します。生の皮は腐敗しやすく堅くなり、そのまゝでは用をなしません。そこで「鞣す」という工程しゅうすを加えて、革「Leather」となります。鞣剤しゅうざいとしては、昔は泥や動物の脳漿、又は唾液を用いた様ですが、その後、植物

性タンニンと化学物質(塩基性硫酸クローム)とが使われる様になりました。この「鞣す」事で「皮」は通常の需要に耐える「革」となります。その特性は、耐熱性、耐寒性に勝れ柔軟性、通気性、可塑性に富み、吸湿と放湿の両面を備えます。しかし耐水性、着色性に劣ります。更に動物の種類により面積や材質の均質性が異り、当然コストが高くなります。以上の様な特性を持つ「革」を、工芸材料としての立場から見た場合、その活用分野は古今東西それ程大きな差はありません。日本で代表的な物は、正倉院御物の漆しつぽく皮箱、仏具、中世の武具甲冑、馬具、江戸時代は火消装束、服飾品等に應用され、そこには多様な用途の歴史が見られます。

ところで私にとりまして、皮革は非常に気難しいけれど変幻自在な材料です。折る、編む、組む、引っぱる、染める、固める、彫る、縫う、切る等の技術を加える事で実に様々な姿を見せてくれる有機質な素材です。しかし、どんなにしても侮れないのは、革は生きた動物の表皮である事です。確かな生命を持っていた革を素材にして、「何を表現したいか」

と問われれば、それはその物の内在しているエネルギーの形です。

例えば、樹々の表皮や地表の文様、風の作る水面の表情は、私の五感を誘発します。その五感の内の「触覚」を呼び起し、体感的な感覚で見える物の奥に潜む「原始的なエネルギー」を取り出したいのです。物の実体は「触れる」という事で生きている実感を与えてくれます。私は「触覚」に拘り、「触れる」事で捉えた生命の肌ざわりを大切に思い、制作に活かしてます。それは、かつて生命を持っていた素材の再生に繋がると思うからです。

その再生が土に帰る輪廻のプロセスの中で、光に満ちた一時である様にと願いながら、「皮革という素材」を活かし切りたいと思ってます。

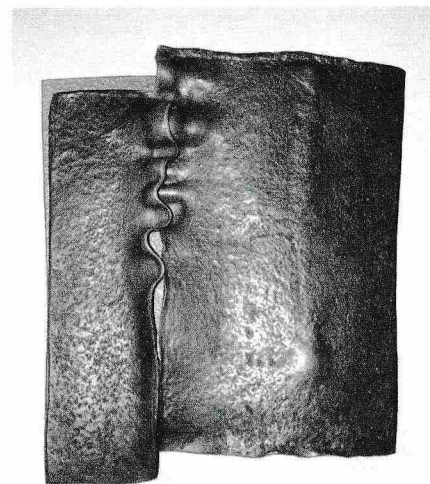


写真1

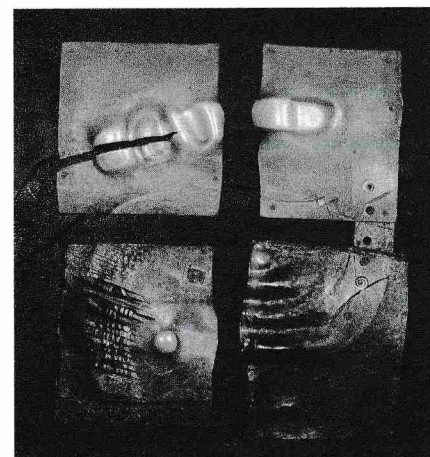
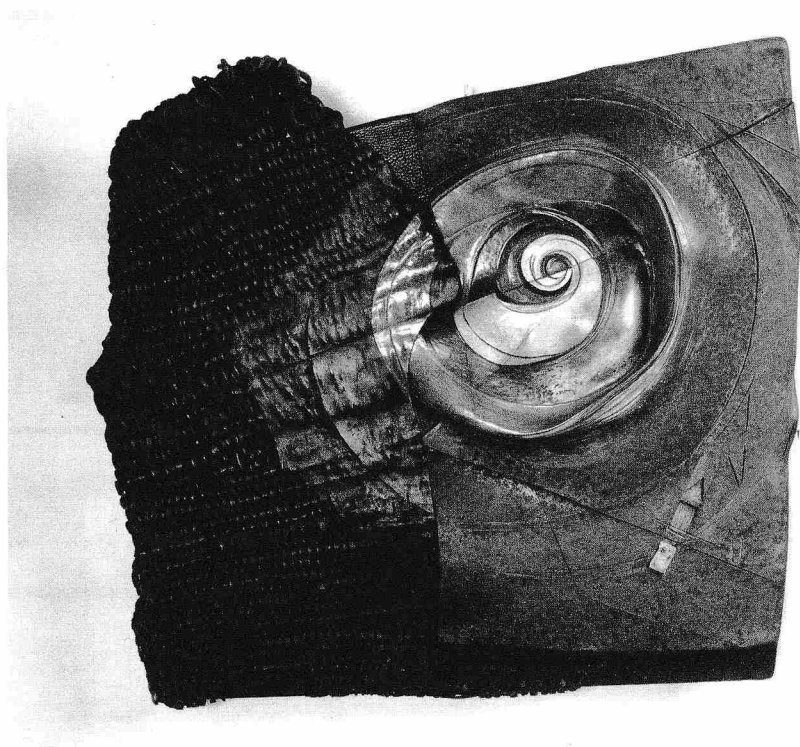


写真2





(日本茶インストラクター第一期生)
(株)葉桐
TERUKO YAMAZAKI
葉桐 清一郎
静岡市新通2-3-9
054-255-5101

『喫茶去』

「喫茶去(きっさこ)」さーお茶をどうぞ! という禅語です。この言葉には広くどんな人でも受け入れるおらかなさの意味があります。二十世紀は物質文明の時代でしたが便利さの代償として心がずさんでできてしまっています。このことは人類にとって非常に由々しき問題なので、なんらかの方法で心を取り戻さなければならぬと思います。当然色々なやり方があるでしょうが、一つにこの「喫茶去」が有効です。お茶を飲むという単純なことで心が落ちついてしまうのです。この大変すばらしいお茶の起源を辿りますと紀元前3000年の中国の伝説上の人物の神農(しんのう)に行き当たります。氏は山野を巡り草木を口にし薬草を探し回りました。当然毒草に当たる場合もありました。その際お茶で解毒したと伝えられております。故に葉の神様と言われてお

ります。時代を経てお茶は日本に伝来し現代に根付いている訳ですが5000年の歴史と文化があるわけです。この折角の宝物が二十一世紀を目前として今の日本で希薄になりつつあります。核家族そしてペットボトルが象徴しておりますが絆がとれていないのです。今回皆様方においしいお茶の入れ方の手ほどきをしたわけですが“香り”を堪能し、甘味、渋味、苦味のバランスのとれた“味”を賞味して居合わせた人達との楽しい語らいで心を和ませることが出来たと思います。その秘訣はなんですかと聞かれた場合、まずは「おいしいお茶をいれよう!」という気持ちを持ってくださいと答えております。ポイントとして70~80度位まで“湯冷ましをする”、茶葉が開くまで一分前後“間をおく”、終わったかなと思ってももう二振り、三振りと“よく搾り切る”。少なくともこの三つのポイントさえ守ればご家庭のお茶が一格も二格もおしく飲

むことができます。こうしたことを静岡に長年住んでいても知らない人がいるのです。私は小振りのバスケットにお茶道具一式を仕込み依頼があれば全国各地へも出向き指導しております。この行脚スタイルですが実は江戸時代に既に活動していた人物がいるのです。京都黄檗宗の禅僧であった売茶翁(ばいさおう)という方です。茶道具を担って京都界限でお茶を売り歩いたのです。「茶代は半文銭から上は幾らでもよろし。又ただで飲むのも勝手次第。しかし、ただよりは負けもうさず。」と語りながら。正に風流人でした。尊敬の念厚く“平成の売茶翁”と自称してお茶の素晴らしさを共有したいと思っております。最後に座右の銘を記して終わりたいと思います。「お茶は香福にして口福で幸福に通ず」ありがとうございました。



aaca会員募集のお知らせ

豊かな美術的環境の想像を目指す団体です。

建築・美術・工芸等の分野の方々による交流・協力を……………。

会員活動

- 都市景観シンポジウム(京都、長野、水戸、静岡で開催)
- 記念講演、シンポジウム
- 交流の集い
- 研修見学会
- aacaトーク 45回を数える講演者を囲んだパーティー形式のトーク。
- 会報の発行 多彩な内容で毎回数多くの参加者を集め、会員相互のコミュニケーションを活発に図っている。

理念

(社)日本建築美術工芸協会は、建築家、美術家、工芸家その他の人びととの連携と協力により、豊かな美術的環境の創造と保存を図り、これを通じて日本文化の向上、発展に寄与することを理念としています。

文化活動

- aaca賞
優れた美術的環境づくりを表彰しています。
- ストリートアート・デザインコンテスト 街中の公共空間の環境づくりに貢献する優れたストリートアートデザインを公募、表彰。
- aaca作品写真展
- 各種展覧会(ヨーロッパ町並展等)
- 「都市景観デザインへの提言」建築業界誌に「都市景観デザインへの提言」を連載し、わが国の美術的環境の創造と保存を提案しつづけています。
- 地域サービス活動 文化は地域の気候風土、風俗、習慣、歴史伝統などに育まれることを理解して、新しい地域文化の形成をめざした地域サービス活動と取り組んでいます。

沿革

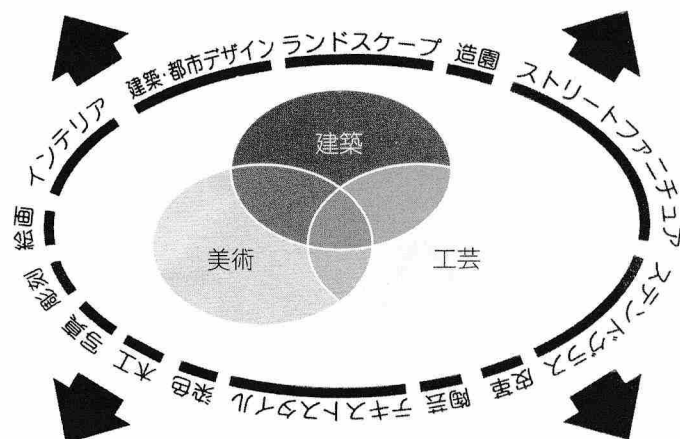
1968年、「新しい建築のなかに美術・工芸・造園などの造形作品をとり入れ、人間性豊かな環境づくり」のために、建築、美術工芸に関する方々相互の交流をめざして、任意団体「建築美術工業協会」を設立。講演会、展覧会、見学会の開催、会報の発行などの活動を続けてきました。1988年4月21日、より幅広い方々との交流を深めると共に、より一層の飛躍をめざして改組、日本建築美術工芸協会を設立しました。そして同年11月28日に文化庁所管の社団法人としての設立許可を得、以来美術的環境の創造を目指し、以前にも増して活発な活動を続けています。

情報・広報活動

国内はもとより、広く海外との交流を図り、建築・美術・工芸などにかかわる情報を収集、分析しています。また、会員である建築家・美術家・工芸家の方々の作品、業績、経歴などをライブラリー化し、一般のみならず広く活用していただける体制づくりを整えています。

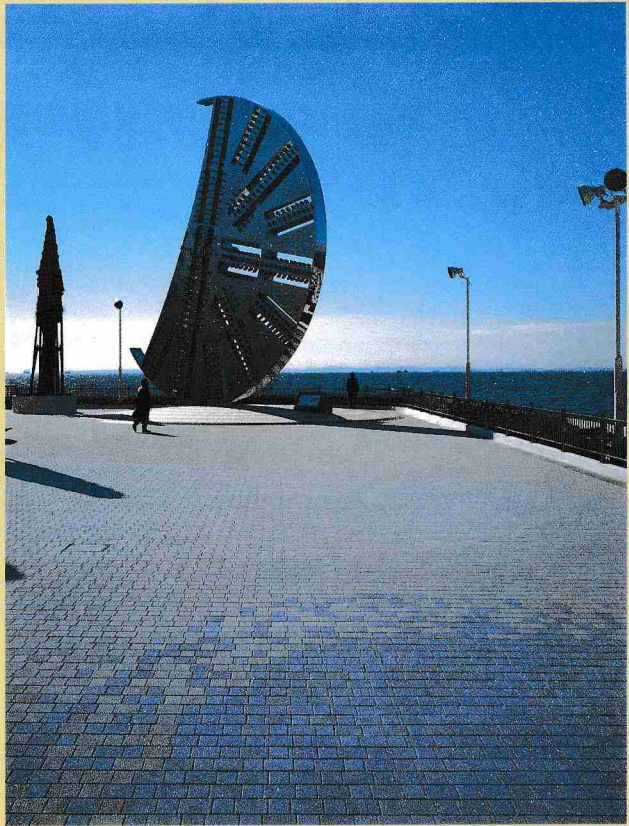
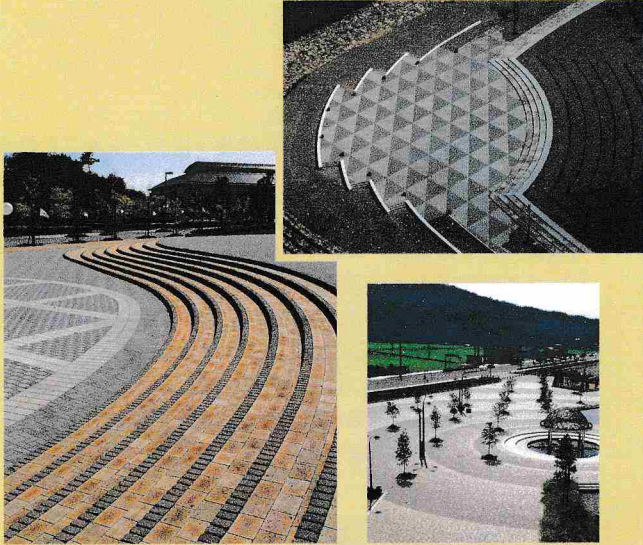
保存・調査活動

日本の各地には世界に誇るべき豊かな環境があります。しかし、激しい開発の波に洗われ、崩れ去ろうとしています。日本の優れた美術的環境を次代に伝えるために、「文化のための1%システム法」の制定運動をはじめ、さまざまな保存活動を進めています。また、調査面においても同法制定に関しての実態追跡調査、歴史的環境・建造物の保存および再生のための調査研究、パブリックアートに関する研究などを地道ながらも着実に続けています。



for GOOD LANDSCAPE

日本興業は、美しく豊かな環境づくりに貢献します。



日本興業株式会社

本社 / 香川県高松市上福岡町721-2
〒760-0077 TEL.(087)831-2828

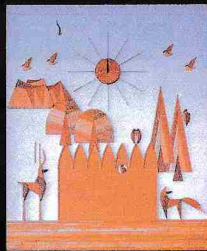
<http://www.nihon-kogyo.co.jp>



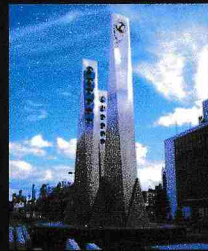
モニュメント



オブジェ



レリーフ



時計塔・カリヨン



サイン



ストリートファニチャー

イー・アイ・エム株式会社

本社

061-1274 北広島市大曲工業団地5-2-5
Tel.011-377-1531 Fax.011-377-1532

北海道支店

061-1274 北広島市大曲工業団地5-2-5
Tel.011-377-6061 Fax.011-377-6091

関東支店

130-0022 東京都墨田区江東橋4-29-12
大東京火災錦糸町ビル
Tel.03-3846-7261 Fax.03-3846-7262

関西支店

564-0063 大阪府吹田市江坂町1-12-4
第2江坂ソリトンビル
Tel.06-6821-3171 Fax.06-6821-3188

